

参 考 資 料 1

● 行動計画（案）の参考資料

● 東京湾再生推進会議

<海底地形>
 ・水深は20m～35m程度で、西側（千葉県側）から東側（川崎・横浜側）に向かって徐々に深くなる形状で、水深の変化は急激なものではなく、比較的なだらかになっている。
 <表層地質>
 ・表層地質は主に泥質。

<海底地形>
 ・水深は急激に深くなり、海岸線から1km程度で20m以深となる。
 <海岸線の状況>
 ・海岸線は大部分が埋立地による人工護岸
 ・人工海浜が横浜港の金沢地区に整備されている。
 （海岸線延長約1km）
 <表層地質>
 ・表層地質は主に泥質であるが、横浜港金沢地区や横須賀港の走水地区など所々に岩質もみられる。

<海底地形>
 ・水深は20m～60m程度で、中央から東側の広い範囲で水深は20m程度となっている（中ノ瀬）、それ以外が水深は急激に深くなっており、この海域の西側の海岸線から比較的近い部分が最も深い。
 <表層地質>
 ・表層地質は西側の水深が40m以上の海域では泥質、中ノ瀬周辺では砂質となっている。

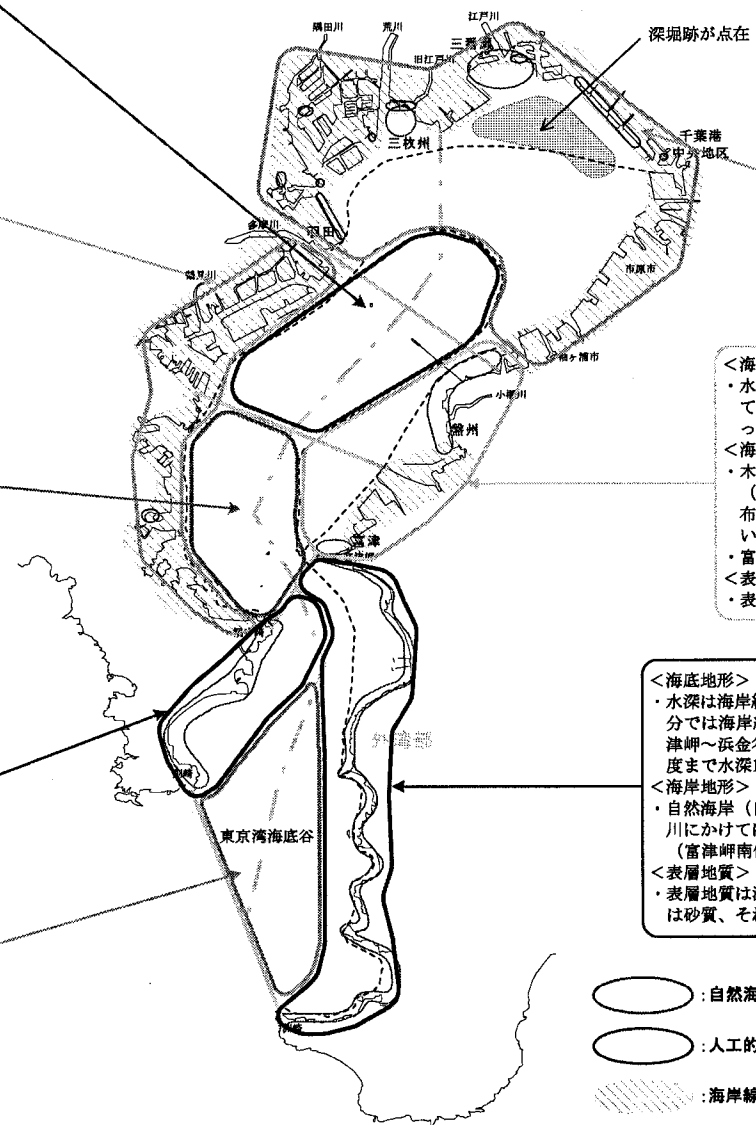
<海底地形>
 ・起伏に富み、観音崎周辺、金田湾周辺では海岸線から1～2km程度まで水深10m以浅の浅海域がみられる。それより沖では急激に水深が深くなる。
 <海岸地形>
 ・自然海岸（自然の砂浜や磯浜）が多く残されている。観音崎や剣崎周辺では磯浜、金田湾では砂浜となっている。
 （観音崎～剣崎で延長約18km）
 ・浦賀港や久里浜港など所々に埋立による人工護岸がみられるが規模は小さい。
 <表層地質>
 ・表層地質は観音崎周辺の海岸線近くで岩質、水深が深い部分では砂質となり、さらに深い東京海底下谷につながる部分では岩質もみられる。

<海底地形>
 ・水深は200m以上の海底谷であり、最も深いところで、600m以上となっている。

<海底地形>
 ・水深は多摩川河口から千葉港中央地区にかけての海岸線から3～5km程度までは水深10m以浅の浅海域、さらに沖合い部から東側では10m～20m程度となっている。
 ・浦安市から千葉港中央地区にかけての沿岸部には場所によっては水深20mを越えるような深堀跡が点在する。
 <海岸線の状況>
 ・海岸線は大部分が埋立地による人工護岸
 ・三番瀬、三枚州といった東京湾内では貴重な自然の干潟・浅瀬が残っている。
 （三番瀬周辺の干潟約85ha、三枚州周辺の干潟約16ha）
 ・東京港、千葉港の埋立地前面に人工海浜・磯浜の整備、浅場の造成が行われている。
 （東京湾内で最も多い、総延長約12km）
 <表層地質>
 ・表層地質は主に泥質。

<海底地形>
 ・水深は20m以浅で小櫃川河口周辺（盤州）から富津岬周辺にかけては海岸線から3～5km程度まで水深10m以浅の浅海域がひろがっている。
 <海岸地形>
 ・木更津港では埋立による人工護岸となっているが、小櫃川河口周辺（盤州）や富津岬周辺には自然海岸（自然の砂浜や干潟）が広く分布している。特に、盤州は東京湾内で最も大規模な干潟が広がっている。（盤州干潟約1,243ha、富津干潟約150ha、砂浜約4.1km）
 ・富津岬は砂嘴が発達した東京湾内でも特徴的な地形となっている。
 <表層地質>
 ・表層地質は主に砂質。

<海底地形>
 ・水深は海岸線近くで20m以浅であるが、東京海底下谷につながる部分では海岸線から3km程度で水深200m以上に急激に深くなる。富津岬～浜金谷までは水深の変化も緩やかで海岸線から4～5km程度まで水深10m以浅の浅海域がつづいている。
 <海岸地形>
 ・自然海岸（自然の砂浜、磯浜）が多く残っている。富津岬から湊川にかけては砂浜、それ以南は主に磯浜となっている。
 （富津岬南側～洲崎間に延長約68km）
 <表層地質>
 ・表層地質は泥質の割合が多く、特に富津岬南側から湊川にかけては砂質、それ以南は岩質となっている。



- : 自然海岸(自然の干潟・浅瀬、砂浜、磯浜等)
- : 人工的に整備した砂浜、磯浜等
- ▨ : 海岸線が主に埋立等による人工護岸

東京湾の環境【地形①】

<生物の生息状況>

- ・東京湾の奥部において、底生生物の種類数、個体数ともに比較的多い海域で、特に、三番瀬周辺では、東京湾の湾口部と同じ程度が確認される。
- ・三番瀬、三枚州などの干潟・浅瀬や千葉港の人工海浜、荒川や多摩川、江戸川等の河川河口部、東京港の水面等が東京湾内における渡り鳥(シギ・チドリ類、ガン・カモ類)の主な飛来地となっている。

<生物の生息状況>

- ・海岸線の状況は東京港等と同じ状況であるが、平潟湾が渡り鳥(シギ・チドリ類、ガン・カモ類)の主な飛来地となっている他は、飛来地等になっていないような地域はない。

<生物の生息状況>

- ・年間を通して、底生生物の生息種、個体数ともに多い海域であり、夏季においても無生物の状況とはならず、四季を通して同じ程度の種、個体を確認することができる。
- ・年間を通して、底生魚類及び甲殻類のシロガチ、シヤコ、サレビ、コチ等の主な生息場所である。この海域では夏季においても生息に影響がでることが少なく、種類数等に関しては季節による変化は少ない。
- ・盤州干潟、富津岬周辺の干潟が東京湾内における渡り鳥(シギ・チドリ類、ガン・カモ類)の重要な飛来地となっている。

<生物の生息状況>

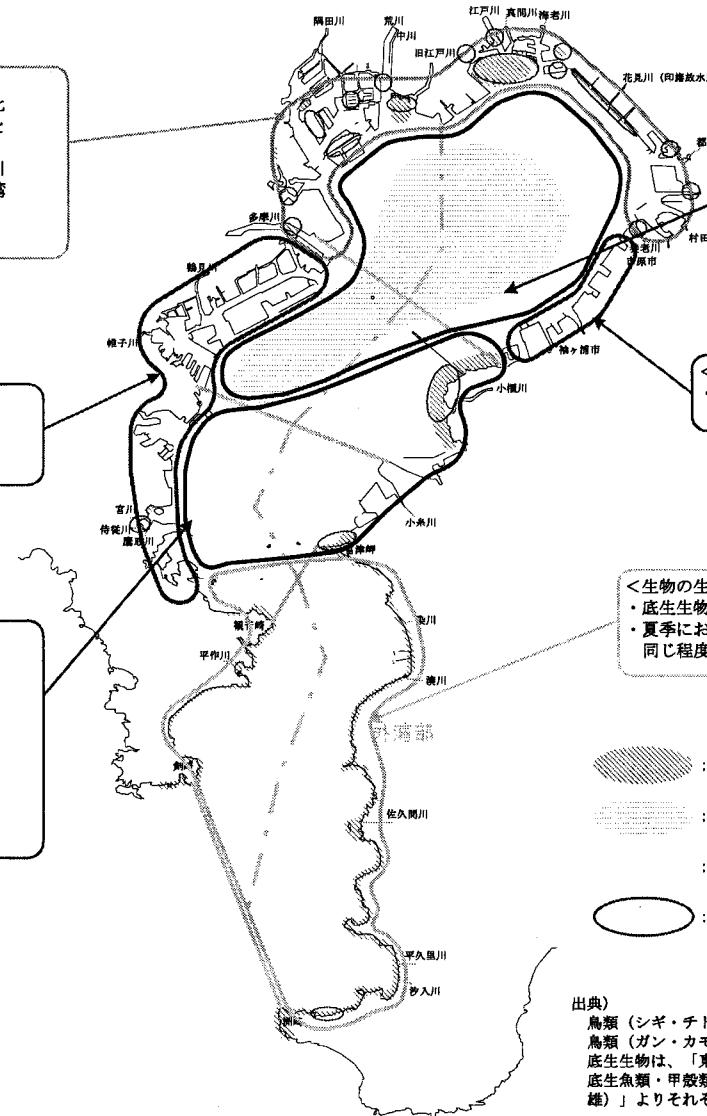
- ・年間を通して、底生生物の生息種、個体数ともに少ない海域である。特に夏季には、無生物に近い状態となる。
- ・年間を通して、マコガレイ等の底生魚類の主な生息場所ともなっているが、夏季には種類数、個体数ともに減少する傾向がある。

<生物の生息状況>

- ・海岸線において渡り鳥(シギ・チドリ類、ガン・カモ類)の飛来地となっているような地域はない。

<生物の生息状況>

- ・底生生物の種類数では東京湾内で最も種類が多い。
- ・夏季においても無生物になることがなく、四季を通して同じ程度の種類数や個体数が確認できる。



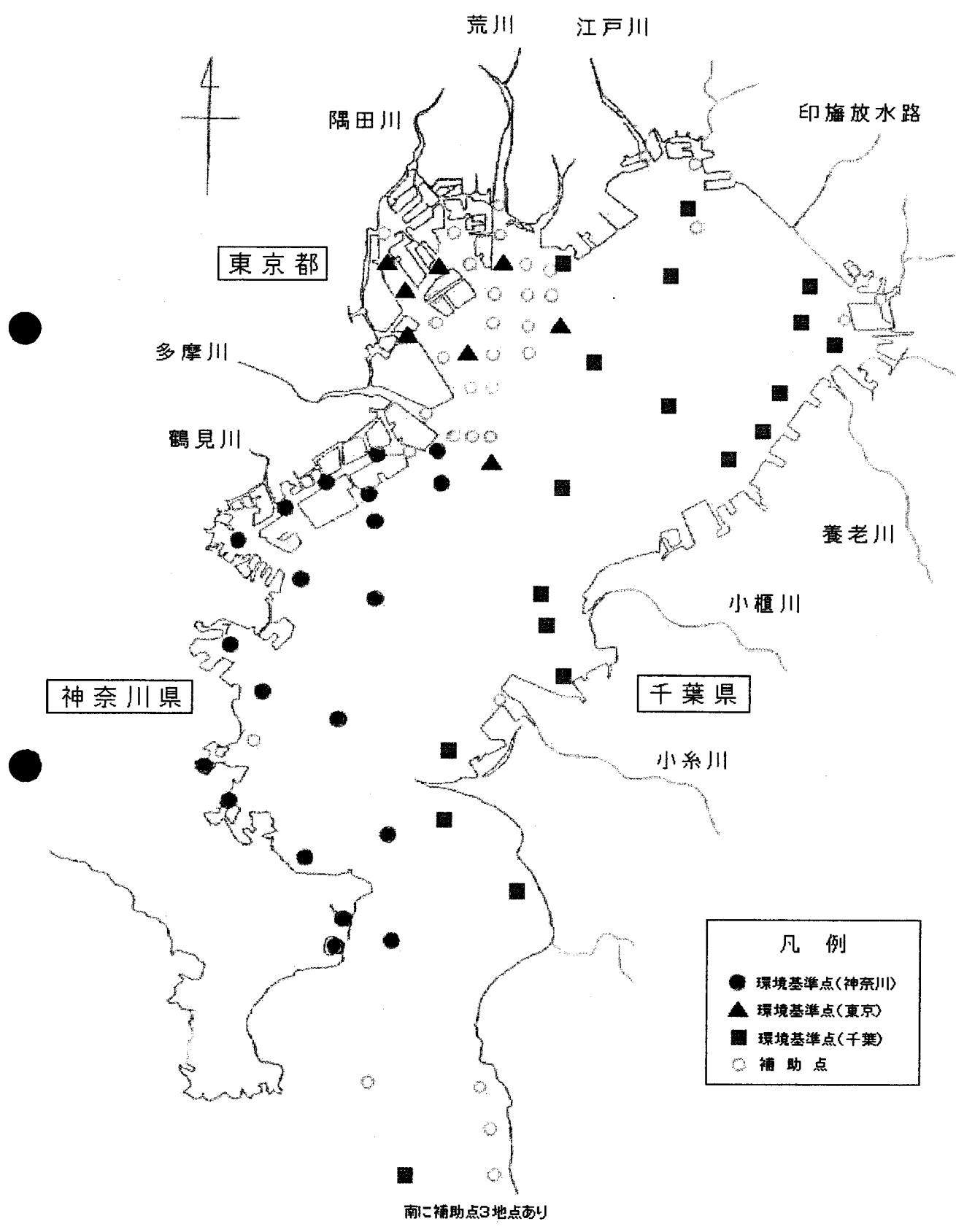
- : 干潟・藻場、砂浜、礫浜(岩礁)等が分布している地域
- : 底生魚類(マコガレイ)の主な生息海域(四季平均)
- : 底生魚類・甲殻類(シヤコ, サレビ, シロガチ, コチ)の主な生息海域(四季平均)
- : シギ・チドリ, ガン・カモ等が確認された主な場所

出典

鳥類(シギ・チドリ類)は、「シギ・チドリ全国カウント報告書1997春(日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会)」
 鳥類(ガン・カモ類)は、「Strix 日本野鳥の会研究報告1989 VOL.8(日本野鳥の会)」
 底生生物は、「東京湾口航路環境調査報告書(平成7年3月、国土交通省関東地方整備局)」
 底生魚類・甲殻類は、「内湾における富栄養化の漁業資源生物への影響に関する研究(昭和62年6月、能勢幸雄)」よりそれぞれ記述。(底生魚類の生息海域に関しては昭和60年11月、昭和60年2月、5月、8月の調査結果)

東京湾の環境【生物生息】

東京湾水質測定地点

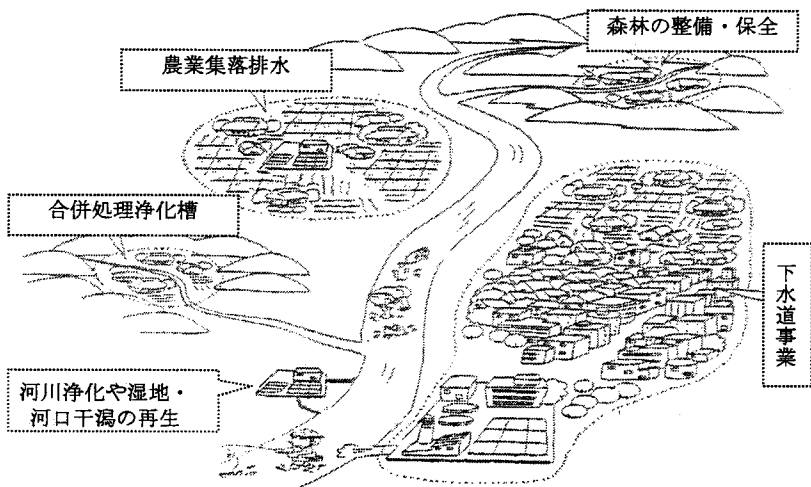


- 凡例
- 環境基準点(神奈川)
 - ▲ 環境基準点(東京)
 - 環境基準点(千葉)
 - 補助点

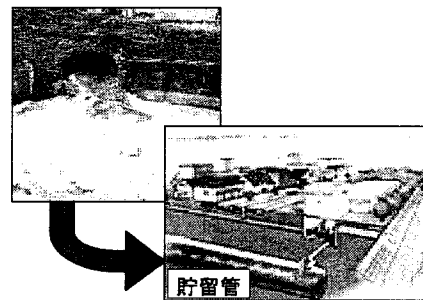
南に補助点3地点あり

具体的な施策のイメージ

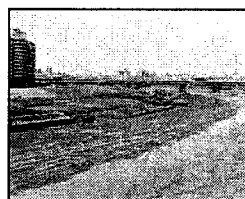
(1) 陸域からの汚濁負荷削減策の推進



陸域からの汚濁負荷削減



合流式下水道の改善

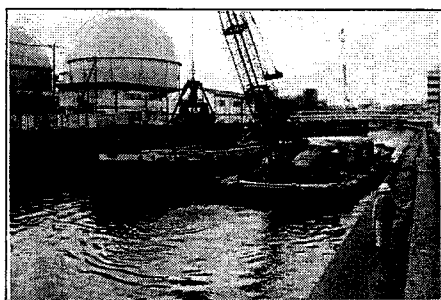


河口干潟の再生

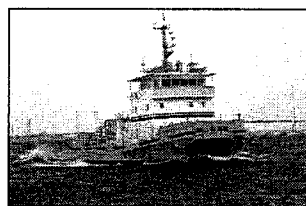


森林の整備・保全

(2) 海域における環境改善対策の推進



汚泥浚渫



浮遊ゴミ・油の回収

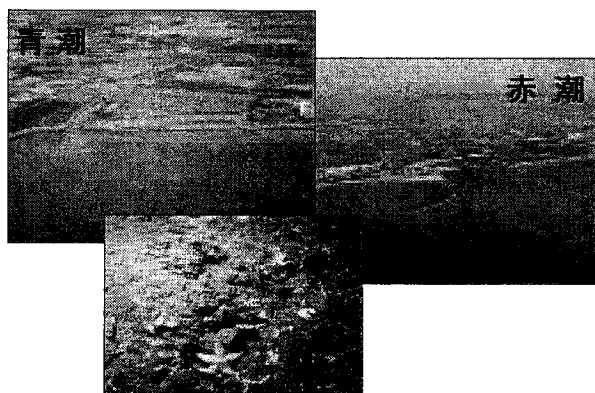


生物の生息場を提供する緩傾斜護岸

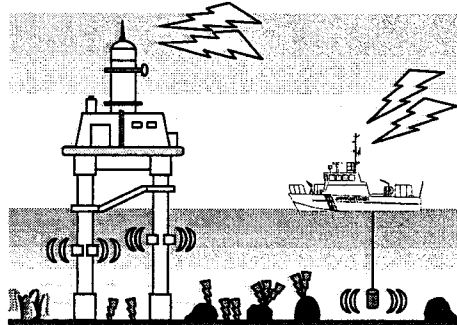


干潟の再生

(3) 東京湾のモニタリング



赤潮・青潮の発生と東京湾の海底



船舶・浮標等によるモニタリングと情報発信

